

2019年度 都心近接エリアにおける鉄道沿線まちづくりに関する研究

調査報告書（要約）

2020.5 公益財団法人都市活力研究所

1. はじめに

新大阪駅周辺地域は、平成30年(2018年)8月に内閣府より都市再生緊急整備地域の候補地域の指定を受けました。この地域を含む大阪市北部エリアは、今後20年間に、北梅田駅(うめきた(大阪)地下駅)、うめきた2期開発に続き、なにわ筋線や阪急なにわ筋連絡線・新大阪連絡線が計画され、リニア中央新幹線・北陸新幹線の新大阪早期延伸も期待されています。その中に位置する十三(阪急十三駅周辺地域)は、今後、このような整備計画等と連動し重要な交通結節点としての役割を果たすことが期待され、これからまちの姿が大きく変わっていくことが予想されます。

本調査では、十三のまちの将来のあるべき姿についての基礎研究として、まちについてのイメージ、評価、望まれる施設などの意見を把握することを目的に行いました。

2. 調査の概要

調査は、十三の居住者、来街者及び関係者を対象に、2020年1月から3月にかけて、アンケート調査とヒアリング調査を行いました。

居住者アンケートは、阪急十三駅周辺地域の概ね半径500mの範囲内の全世帯9,198世帯に質問用紙を郵送し、592人の有効回答を得ました。

来街者アンケートは、十三を認知している大阪府・京都府・兵庫県在住者に対して、WEBアンケートを行い、1,243人の回答を得ました。

また、十三に住む主婦、勤務者やまちづくり関係者に、ヒアリング調査を行いました。

3. 居住者アンケート調査結果の概要

回答者の男女比は同程度であり、年代をみると「70歳以上」が25.2%と最も多く、次いで「60～69歳」(18.1%)、「50～59歳」(16.9%)の順となっています。

図-1 回答者の性別構成

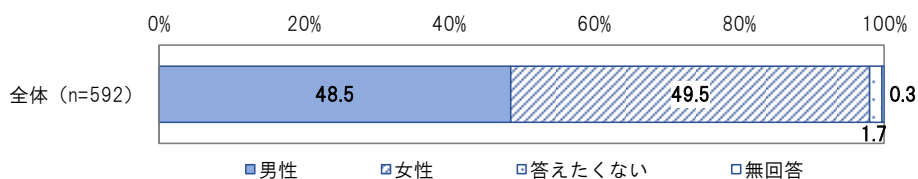
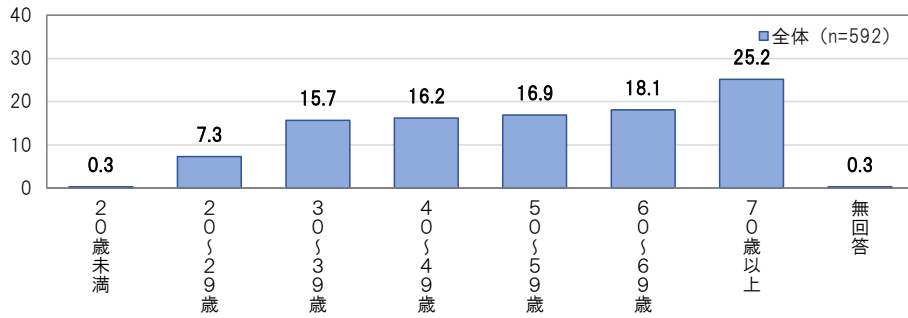
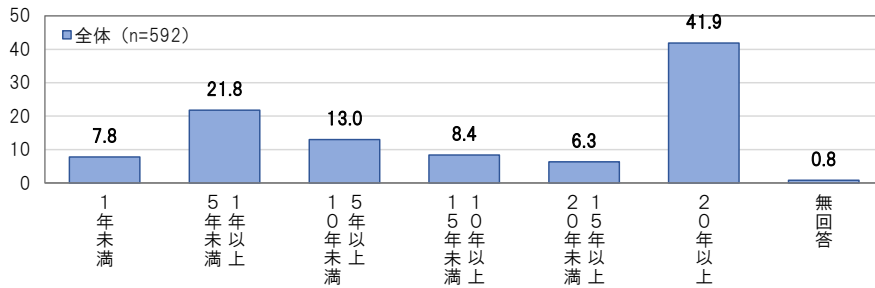


図-2 回答者の年代



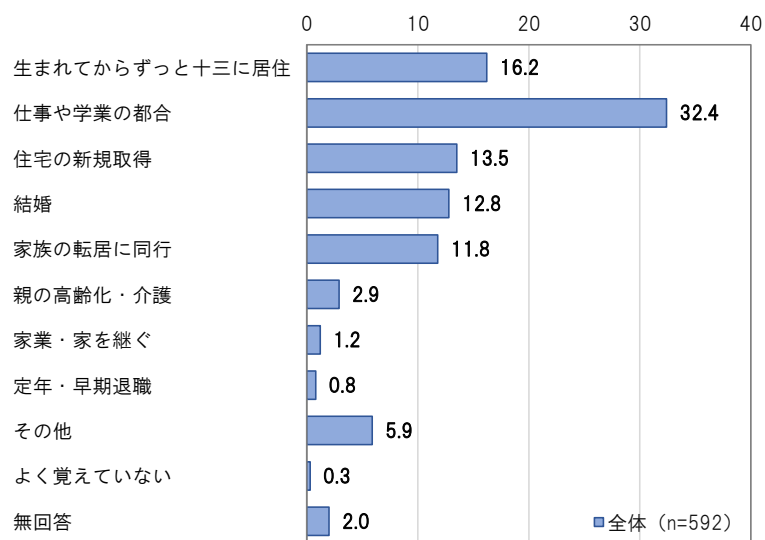
十三における居住年数は20年以上の居住者が41.9%、5年未満が29.6%という回答となりました。

図-3 十三の居住年数



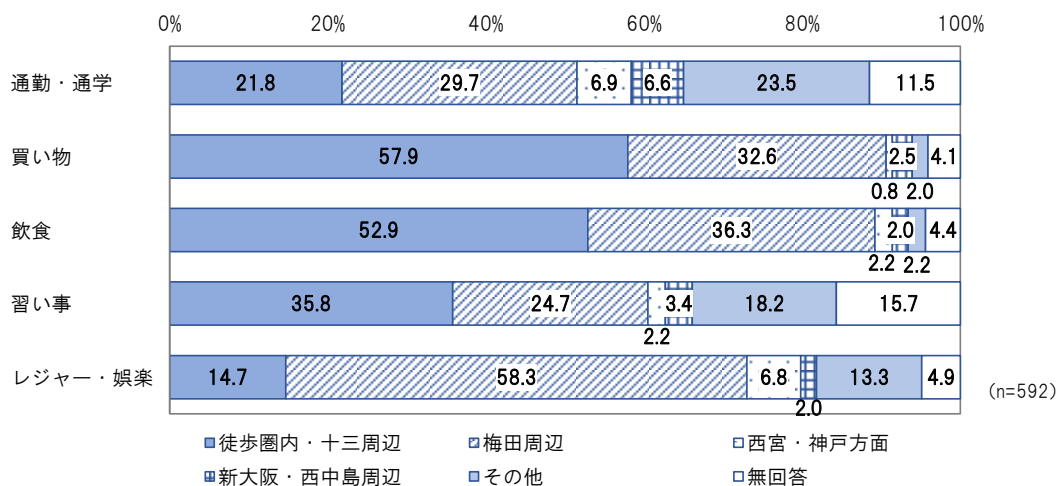
十三に住み始めた理由は、「仕事や学校の都合」が32.4%と最も多く、その内訳をみると男性や、40歳未満の人でその割合は高くなっています。

図-4 十三に住み始めた理由



日常の買い物や飲食では十三周辺の利用が50%以上、レジャー・娯楽や通勤・通学では十三以外に往訪している人が概ね80%以上であり、特に梅田周辺への往訪が多くなっています。

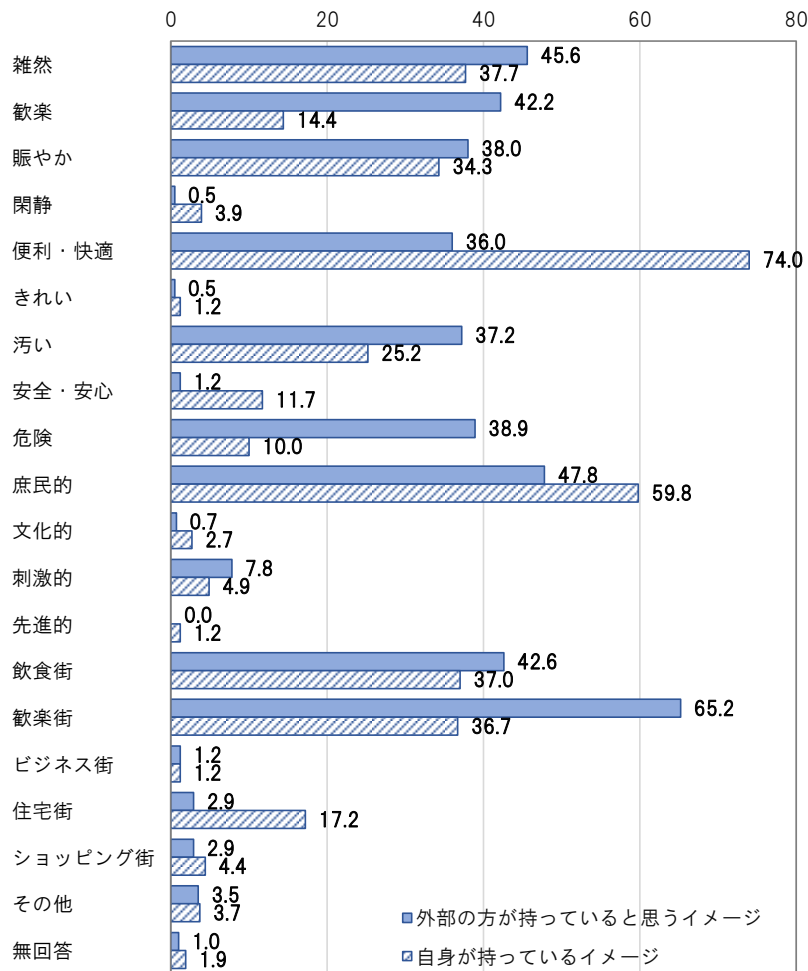
図-5 目的別の訪問地域



居住者に、十三以外に住む「外部」の人が思っている十三のイメージを聞いたところ、外部からは「雑然とした、賑やかな、歓楽のまち」と思われているとの回答が多くありました。居住者自身としては「便利で、快適な、庶民的なまち」と思っている回答が多くありました。

このように、十三のイメージのギャップが大きい項目についてみると、「歓楽街」（外部 65.2%/居住者 36.7%）、「危険」（外部 38.9%/居住者 10.0%）では外部のイメージのほうが高く、「便利・快適」（外部 36.0%/居住者 74.0%）では居住者のイメージのほうが高くなっており、倍以上の開きがあることがわかりました。

図-6 十三のイメージ



居住者の十三の好きなところとしては「便利・快適」を挙げる人が80.4%あり、次に「庶民的」が続きます。それを裏付けるように、公共交通機関の利用や買い物、通院などの“利便性”を挙げる人が約80%以上います。一方で、“地域性・コミュニティー”“住環境”公園・緑などの“まちの整備”に対する評価は低くなっています。

図-7 十三の好きなおとこ

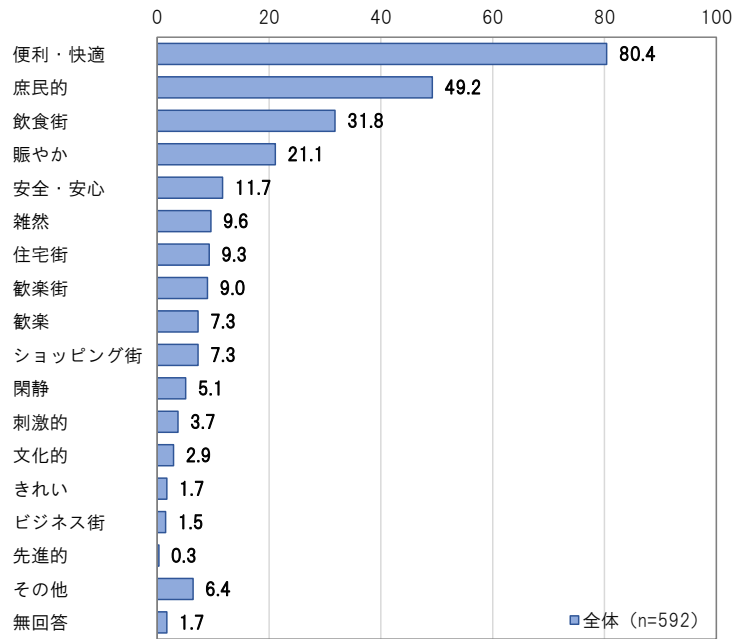
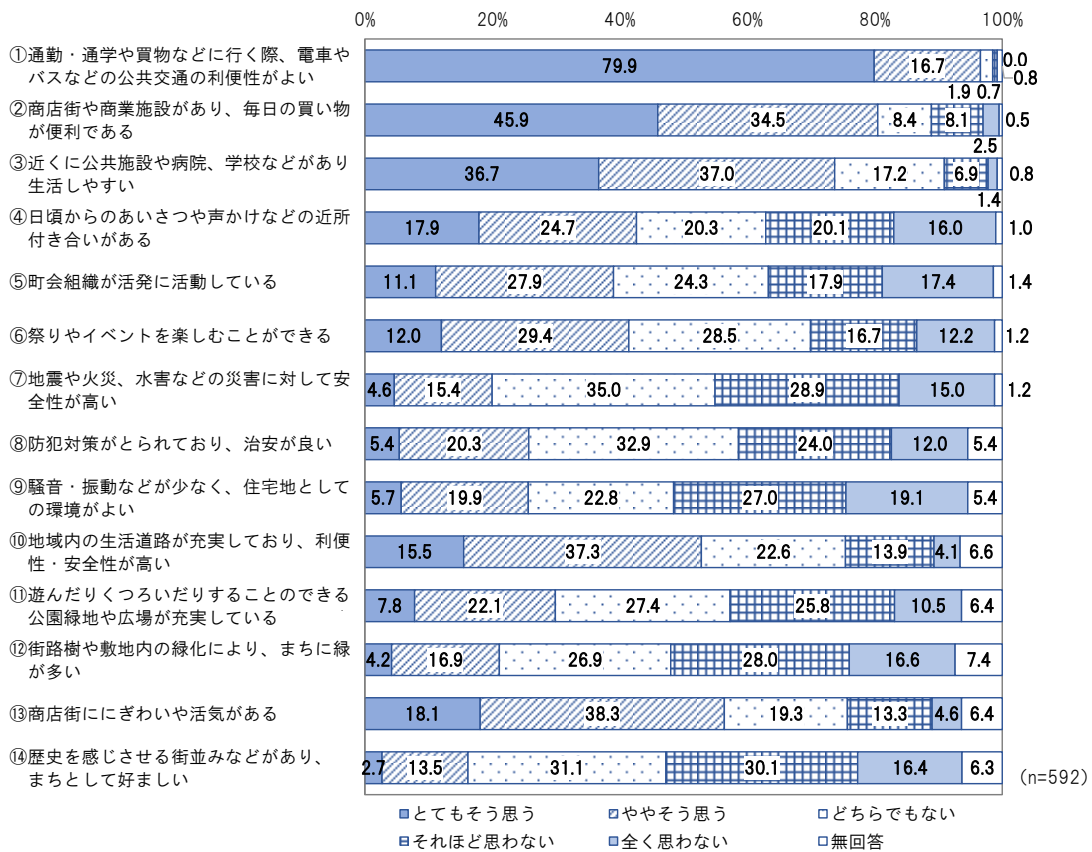
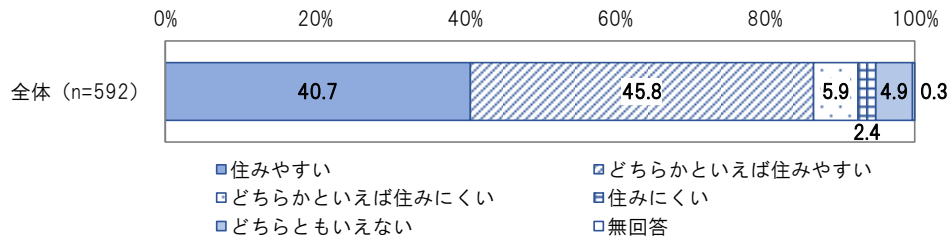


図-8 十三での暮らしに対する評価



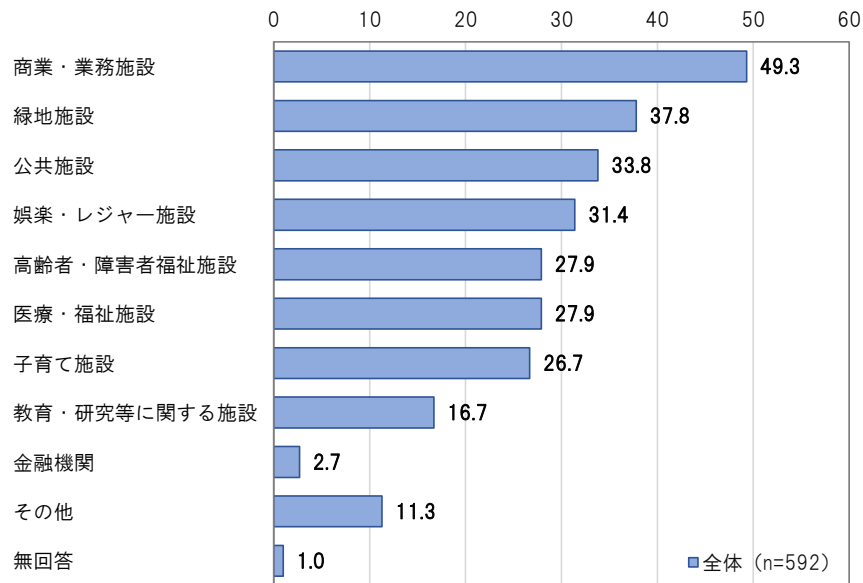
回答者の 85%以上の方が十三のまちを住みやすいと感じており、ほぼ同数が今後も住み続けたいと考えています。

図-9 十三の住みやすさ



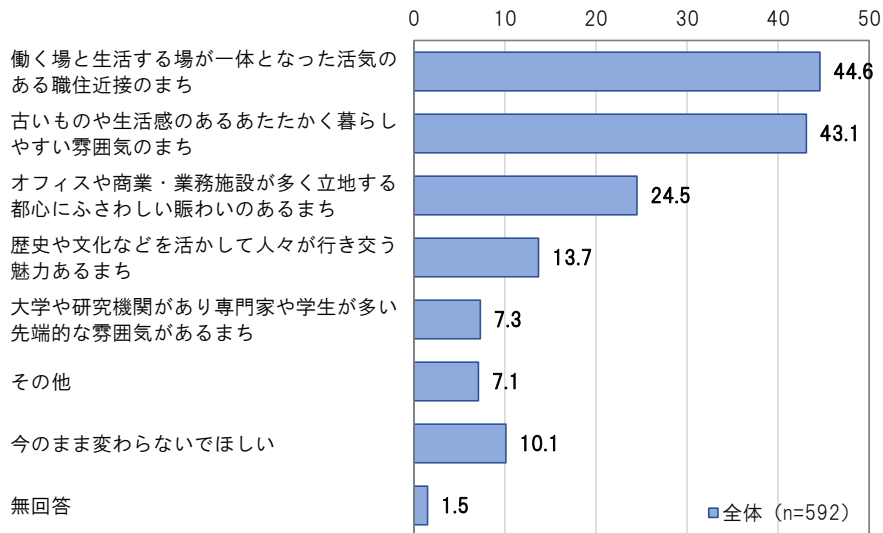
十三に新たに整備して欲しい施設は、「商業・業務施設」、次いで「緑地施設」となっています。「緑地施設」は女性からの期待が高くなっています。

図-10 十三に新たに整備をして欲しい施設



将来の十三のまちの姿は、“職住近接”でありつつ、“古いものを残した暮らしやすい雰囲気”が望まれています。一方で“今のままで変わらないでほしい”という声も一定数あります。

図-11 十三の将来のまちの姿



4. 来街者アンケート調査結果の概要

回答者の男女比は約 6 : 4 であり、年代をみると「30～39 歳」が 27.8%と最も多く、次いで「40～49 歳」及び「50～59 歳」(22.5%)、「20～29 歳」(12.1%) の順となっています。

図-12 回答者の性別構成

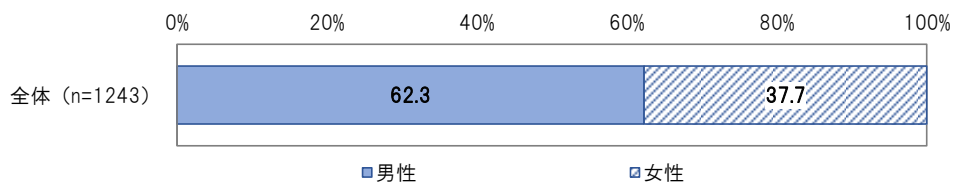
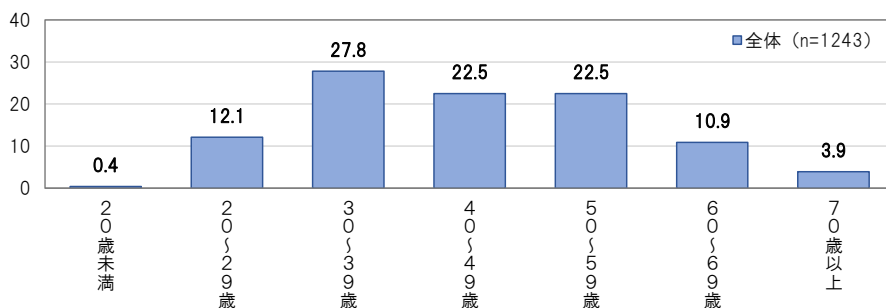
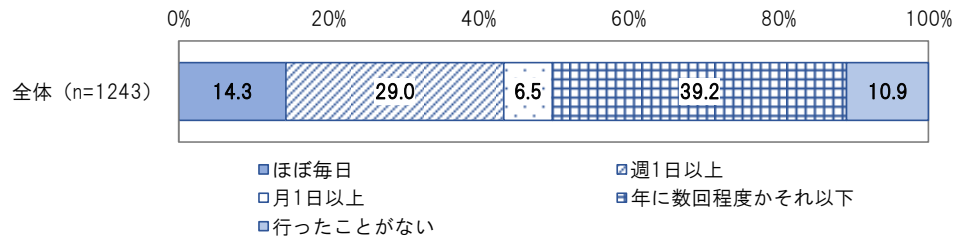


図-13 回答者の年代



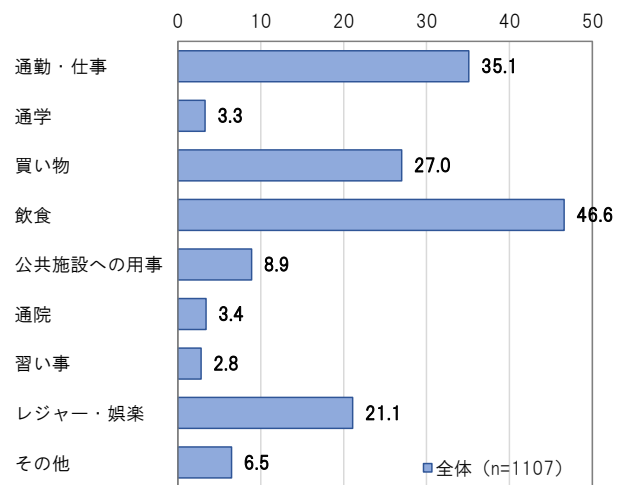
十三への来訪頻度では、年数回以下の来訪者が最も多いものの、月1回以上の来訪者も概ね半数を占めています。

図-14 十三への来訪頻度



十三への来訪目的は「飲食」が46.6%と最も多く、次いで「通勤・仕事」、「買い物」となっています。利用交通手段では電車が多く、大阪市内からの来訪では約1割は自転車を利用しています。

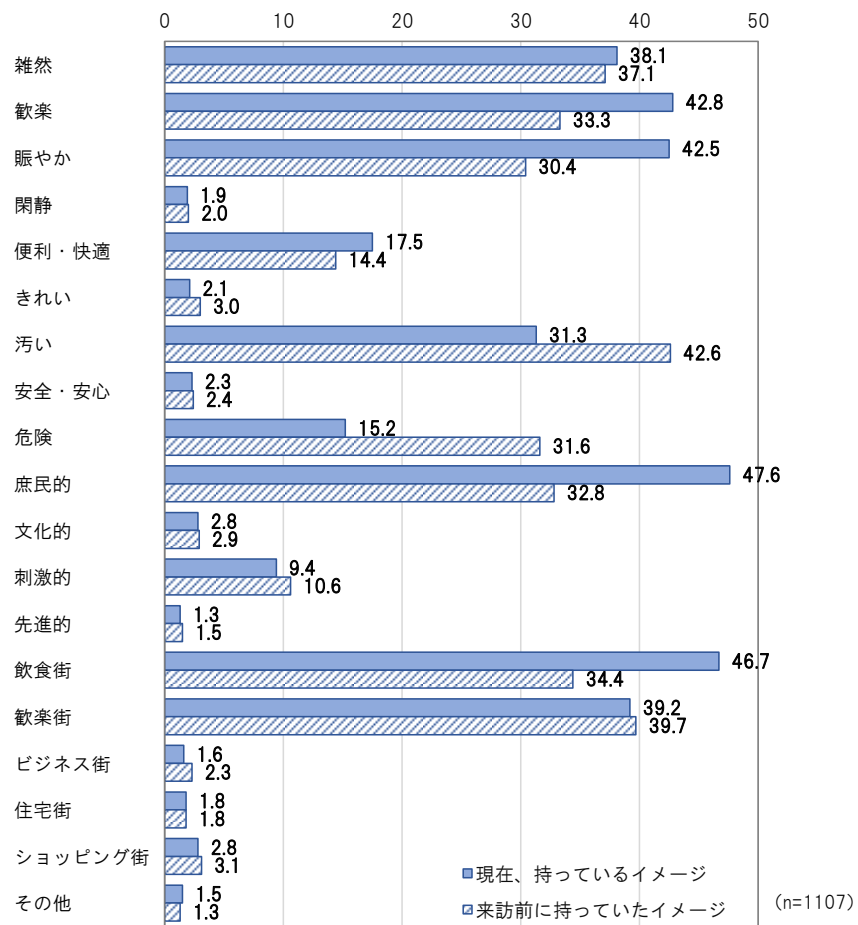
図-15 十三への主な来訪目的



十三のまちへの来訪前後のイメージの違いについて、来訪前には“汚く、危険な”のイメージでしたが、来訪後には“庶民的で、賑やかな、歓楽、飲食のまち”のイメージになったと回答されています。

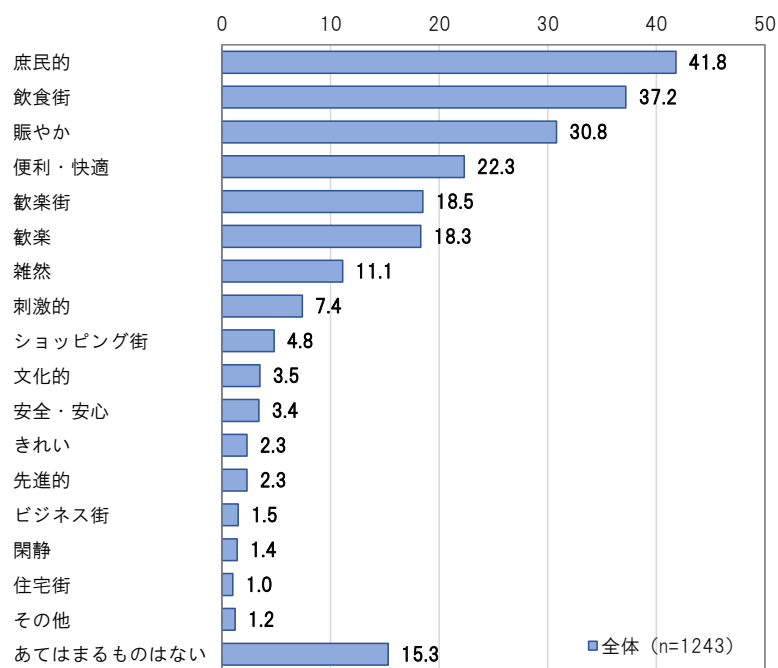
来訪前と来訪後では、「庶民的」「飲食街」というイメージが高くなる一方、「危険」「汚い」といったイメージは低くなっています。

図-16 十三のイメージ



来街者からみた十三の好きなところは、「庶民的」「飲食街」「賑やか」「便利・快適」が挙げられています。

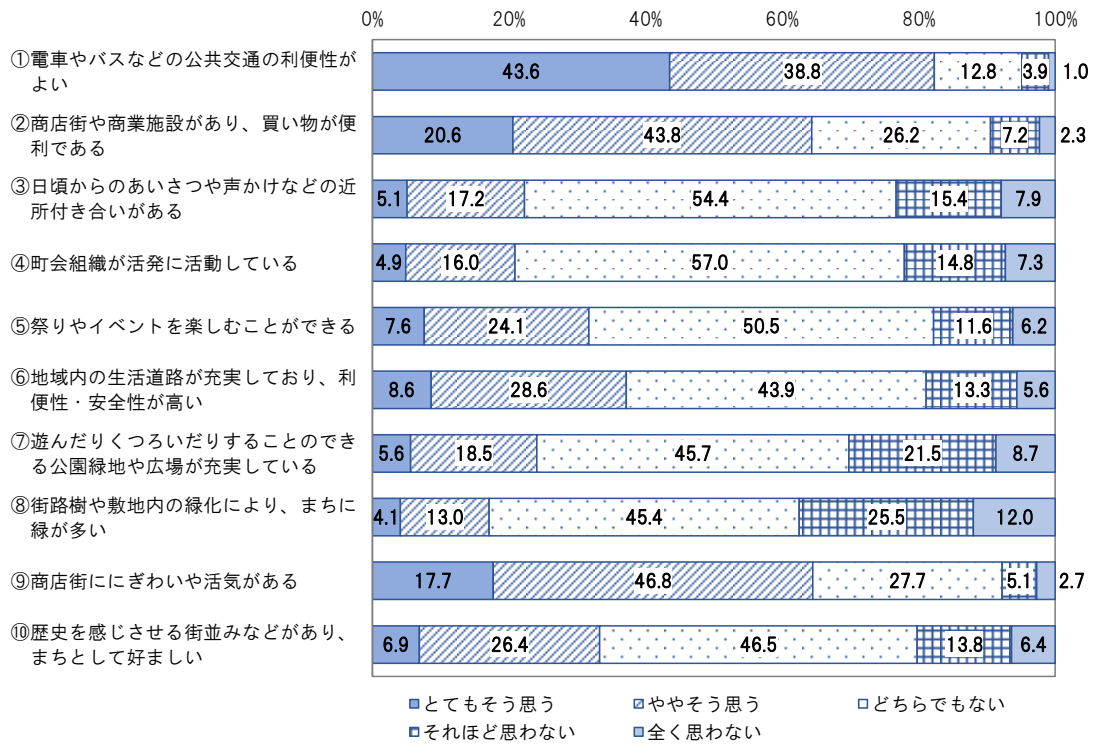
図-17 十三の好きなところ



十三のまちに対する評価については、公共交通機関の利用の“利便性”に対する評価が80%を超え、買い物の“利便性”や商店街の“賑わいや活気”も高く評価しています。

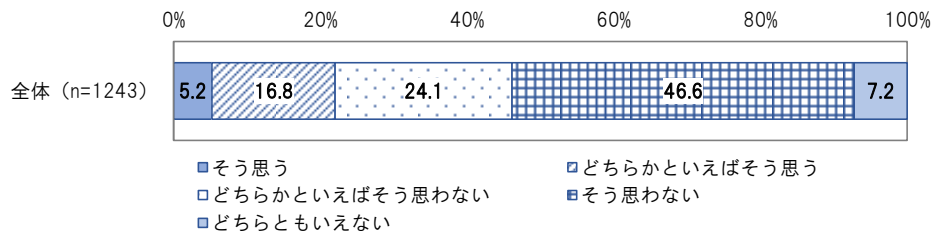
一方、公園・緑などの“まちの整備”への評価は低い評価をしています。

図-18 十三のまちに対する評価



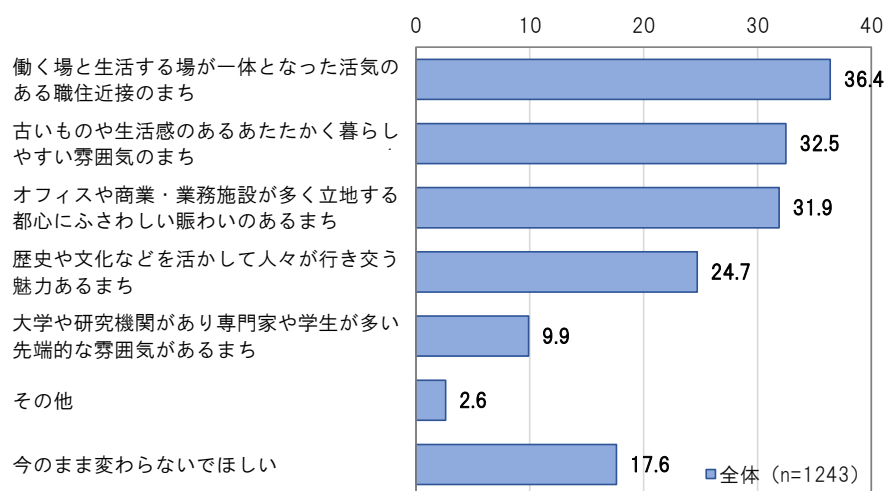
来街者で十三に今後住んでみたいと思う人は約 20% という結果でした。来街する頻度（月 1 回以上）が多い人は、この割合が高くなっています。

図-19 十三での今後の居住の可能性



将来の十三のまちの姿は、“職住近接”でありつつ、“古いものを残した暮らしやすい雰囲気”が望まれています。“今のままで変わらないでほしい”という回答もあり、居住者の意向と同じくして、現在の十三の良さを活かすことを期待する来街者が多いと考えます。

図-20 十三の将来のまちの姿



5. ヒアリング調査結果の概要と考察

十三エリアの会社員、主婦、店舗経営者、まちづくり関係者、メディア関係者に、「十三のまちについて」と「今後の十三に望むこと」を伺いました。

「この10年で治安がずいぶん良くなった」「安全で、安心して暮らせるまち」との声がありました。居住者アンケート調査でみられた、十三のまちの“危険”“汚い”のイメージに対する、外部からと居住者のギャップや来訪前と現在のギャップは、この10年の十三のまちの良い変化の発信が不足していることが考えられます。

「歓楽街も含めて十三のイメージが形成されており、それがあつことを含めて十三の魅力」というように、清濁合わせ持つことが十三のまちの魅力であり、アンケートで“今のままで変わらないでほしい”という意見が一定数見られたことからそれが窺えます。

「公園が少ない」「道路が狭く、自転車交通量が多い」「子どもには危なくて怖い」との声が主婦の方から上がりました。「大人にとって楽しめる場所となっている」との意見もあったように、単に不足している機能を補うのではなく、今後の十三のまちを誰をターゲットとするかを考えて、導入する機能を検討していくことも必要と考えます。

まちづくり関係者からは「駅が街を分断している」との指摘がありました。今後、計画されている交通網の整備に合わせて、駅を中心としたまちづくりを検討していくことも必要かと思ひます。また「区役所や武田薬品の跡地」「淀川河川敷」など、貴重なまとまった空間の利活用への期待も寄せられました。

6. 最後に

今回の調査から、従来のまちの歓楽街というイメージと異なった、十三のまちの魅力をつかむことができました。十三は、利便性が高く、買い物にも便利で、飲食店も多い、暮らしやすく、庶民的で、安全安心なまちであることです。訪れれば訪れるほど、住めば住むほど、その良さがわかるまちであることもわかりました。

一方、公園や広場、緑など不足する機能を指摘する意見もみられ、貴重な開発余地の開発だけでなく、駅周辺の美化や淀川河川敷の有効利用もまちの魅力アップにつながるものと思います。

居住者アンケートからは、そのまま十三に住み続けたいという回答が多く、今の居住者にとっては十三に対するまちの評価は高いことがわかりました。一方では、来街者からみればその評価は決して高いものとは言えませんでした。十三をよく知るほど十三の魅力を感じているものと思われ、人を呼びこみ、十三を知る、知らせる機会を増やすことが重要と思います。